楽しく美しいまちづくり通信…74

こんな街灯があったらいいのに

夜を夜として憩う暮らしの中で

「秋の日は釣瓶落とし」といいますが、日暮れとともに急に暗くなる街を眺め、家路を急ぐ今日この頃です。

車窓から目をやると、当たり前のように道路の両側に公衆街路灯（街灯）が並んでいます。

何気なく眺めてみると、形状も明るさも、間隔もまちまちであることに気付きました。

一日の半分が夜であり、市民の安全に役だっている街灯、その内容によっては街がもっと素敵になるかも、と興味がわき、車を二戸駅から金田一温泉に向けて走らせてみました。

石切所から堀野にかけての街灯は、歩行者には明るい**水銀灯**が主流です。その後、長瀬橋を通り金田一バイパスに入ると、国道沿いは車の通行に向く**ナトリウム灯**に変わります。

そして、金田一コミュニティセンター前を右折し、金田一温泉センターに向かうと、ノスタルジックで、座敷わらしをイメージした水銀灯が現れ、思わず灯りの下に車を止め、時がたつのを忘れて、上を見上げていました。

二戸市内の街灯は、国・県道、市道などを合わせて、約三千灯あります。

道路の管理者が設置するものもあれば、町内会や商店街が設置するものもあります。

大半は、一灯設置するのに数万円から数十万円の値段で、最近では街のイメージの向上を目指して、百万円を超える**「鋳物造り」**の街灯も流行だそうです。

二戸の電気の歴史は、今から八十五年前にさかのぼりますが、この度完成した二戸市シビックセンター一階ガレリアの壁には「二戸の主なできごと」（年表）が掲示されており、その中に「一九一四　大正三　電灯が初めて二戸につく」の一文があります。

大正三年五月四日、安比川の水を利用した大渕発電所で一五〇キロワットが発電され、千百二十五戸の需要家で、二千五百八十一灯に電灯がともりました。

単純計算で、一戸当り六〇ワットの電球が二個ついたことになります。

八十数年前の人々が、歓びとともにその明るさを体感したであろう姿が偲ばれます。

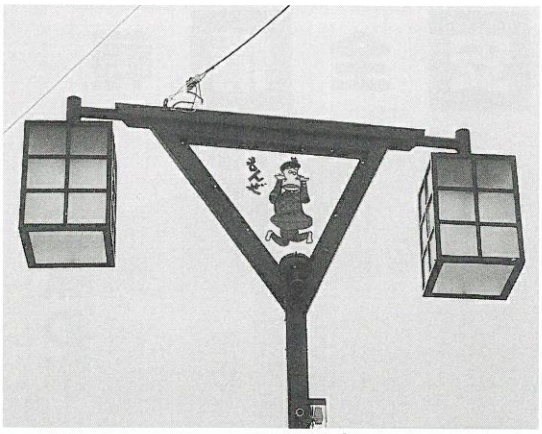
人間と灯りとの関係については素人ですが、二戸祭り期間中、道路の両脇を飾る**ちょうちん（白熱灯）**の行列に引かれ、夜道を歩きたくなった経験がある方もいるかと思います。

東京の繁華街で見かける深夜までの人込みは、灯りが人間に作用するウキウキとした感覚と無縁ではないと思います。

自分たちの住む地域が素敵に快適になるために、自分たちの力で何ができるのか。

秋の夜長、夜を夜として憩う暮らしの中で、地域を照らす街灯選びは、子どもからお年寄りまでが共有できる楽しい話題作りであり、路面だけが明るくされるのではなく、街全体が明るくなるような街灯（照明）が欲しくなりました。

座敷わらしをイメージした水銀灯



二戸市シビックセンター前の街灯

こよみ

11月11日～12月10日

★11月★

11日（木）世界平和記念日、チーズの日
12日（金）
13日（土）
14日（日）
15日（月）七五三
16日（火）**4か月健診**（保健センター）、**離乳食セミナー・中期**（保健センター）
17日（水）
18日（木）**法律相談**（第3相談室）
19日（金）
20日（土）
21日（日）
22日（月）
23日（火）勤労感謝の日、小雪（二四節気）
24日（水）**行政相談**（第3相談室）、**1歳6か月健診**（保健センター）、**離乳食セミナー・後期**（保健センター）、**親子ブラッシング教室**（保健センター）
25日（木）**税務巡回相談**（第3相談室）
26日（金）
27日（土）
28日（日）税関記念日